

憧れの「アハルテケ」騎乗の旅レポート

「乗馬ライフ」2015 01 Vol.252に掲載 レポート・写真 旅馬さん(神奈川県)

いざ、「黄金の馬」の国へ

旅行会社から突然飛び込んできたツアー企画

昨年(2013年)11月のこと、週末しか開かない自宅PCでメールをチェックしていると、見知らぬ人からメールが届いていた。開いてみると、以前利用したことのある旅行会社からのアンケートの依頼だった。午年に向けて企画中のトルクメニスタンでのアハルテケ乗馬ツアー!!

数年前、国立サーカス劇場の開幕式での馬のショーに出るため、必死に練習している青年の姿を、あるドキュメンタリー番組で見て以来、憧れていた国と馬である。チャンス到来!とばかりに早速、ツアーに含まれていなかったこのショーを追加しては?という提案をして返信した、ぜひ参加したい、とのメッセージも添えて。

今年1月の週末、ようやくツアーの企画が固まったとのメールが届いた、当初入っていなかったショーの見学も、含まれていた。日程的には少々厳しいが、“黄金の馬”アハルテケに会えるのなら、多少の無理は仕方がない。できれば日程をちよつとずらしてほしいが、とにかく参加したいと返信した。そして申し込み締め切りの2カ月前、状況確認をしたところ、人数が集まっていない、とのこと。

一人でも参加したいと思ってはいたが、それでもと、知り合い数人に声をかけてみた。その中で、海外専門で駆けまわっているFさんが同行して下さることになった。本来は5名以上で催行のツアーではあったが、旅行社も午年に何とか実現させたかったようで、2名での催行が決定した。

そのときすでに出発1カ月前。それからは非常に大変な日々であった。

トルクメニスタンについての知識は皆無に近かった

トルクメニスタンに渡航するには、さまざまな手続きが必要だった。ビザが必要であるものの、日本では取得できない。そこで、現地で取得することになる。そのためには、招待状が必要だった。まずパスポートの写真ページを送る。多くの国ではコピーの送付になると思うが、なんとPDFをメールで送信。さらに証明写真もPDFにしてメール送信、であった。

事前申告必須内容には、「学歴」までであった。過去に50カ国近くを旅してきたが、学歴を伝えたような記憶はまったくない。果たして何のために必要なのかと思ったが……。

何はともあれ、早出残業の合間にこのような準備を終え(本当に忙しかった!)、いよいよ未知の国の未知の馬に会いに行けることになった。

事前に牧場でお世話になるガイドさんは、当初の予定の英語ガイドではなく、日本語ガイドに変更になった、という朗報が入っていたので言葉の心配はなかったが、

直行便のないトルクメニスタン（この国は左ページの地図のようにカザフスタン、ウズベキスタン、アフガニスタン、イランとカスピ海に囲まれている）へは、イスタンブールでの乗り継ぎとなる。



牧場にはアハルテケが35頭、飼われている。これ、実はすごい数字。アハルテケは世界で3500頭くらいしか育成されていないのだから。

はるか昔に訪れたトルコの空港の記憶は、今では皆無に等しく心配なので、トルコ大好きな馬関係の知人に聞いたりもした。

肝心のトルクメニスタンについての知識も、多少は得ておかなければとは思ったものの、得られる情報は非常に少ない。

誰もが知っている『地球の歩き方』にさえ、ほんの数ページしか掲載されていない。

ロシア関係の旅行会社の方によると、「オイルが産出される裕福な国家で、観光事業はつい最近、開始したような状況。イスラム同家ではあるが、飲酒・喫煙は自由。意外にも永世中立国であり、人々はお客をもてなすことが大好き。ただし、独裁国家のため、“偉い人”の都合による変更は時々ある」とのこと。……一抹、いや十抹くらい(?)の不安を抱えつつも、いよいよ出発!

入国するまでの手続きは、とても煩雑

5月末、成田発のトルコ航空に乗り、イスタンブールで無事乗り継ぎ、乗り継いだ飛行機のあまり大きくない機内で、アハルテケが描かれた大きなビニール袋を持つ

人を見て、あの袋が欲しい!などと思ったりしつつ、首都アシガバットの空港に到着。空港はきれいだが広くはなく、少々冷たい印象であった(深夜だった所為もあるだろうか?)。

入国審査の列には、何かで見た民族衣装の女性や、エキゾチックな顔立ちの男性たちの他、日本語で話すビジネスマンらしき方々も。日本から持参した招待状はどこで見せるのか、ビザ代はどこで支払うのか、その中の一人に教えていただいた。

審査の前にまずWIZAと書かれたカウンターに行き、招待状を渡す。その隣のカウンターでビザ代を支払い、再度WIZAカウンターでビザをもらう。それからようやく入国審査である。

段取りを教えてくださいました方にどんなお仕事かは伺わなかったが、もう何十回もトルクメニスタンにいらしているという。ビジネスでも毎回同じ手続きだとしたら……、本当に大変なことだ。

手続きを終え、スーツケースを受け取り、迎えの女性に会えたのはすでに深夜(早朝)3時を過ぎていた。車でホテルに送ってもらい、英語で、明日(今日)朝10時にホテルのロビーでということだけを聞き、ようやく部屋に落ち着いた。部屋にはバスローブやスリッパ、それにバスタブもあり、広くて快適であった。

砂漠の国なのに、水も電気も豊富なことにびっくり

翌日は市内観光。2時間ほどの睡眠時間ではあったが、とにかくガイドさんの話を必死で聞いていたので、睡魔に襲われることはなかった(時差は4時間だが、私もともと時差ボケをしない)。市内は道がとても広く、白と金、ほとんど2色の大きな建物が整然と並んでいる。至るところに前大統領の像、現大統領の絵があった。どちらにも騎乗姿があるところが、いかにもアハルテケの国らしい。

電気は豊富なようで、日本でもクリスマス時期によく見かける電飾が多くの建物の壁にも見られた、停電はしないのだろうか。心配になって聞いてみたが、blackoutという言葉はガイドさんには通じなかった。停電はほとんどなく、もし切れても即、復旧するそうだ。

トルクメニスタンは砂漠の国というイメージが強かったので、街のあちこちに噴水があるのには驚いた。山からの水や人工の水源もあり、水も豊富なのだそうだ。

バザールも訪れたが、撮影は禁止。野菜があると、馬乗りとして気になるのはやはり、人参の値段。1キログラムで100円ほどだった。もちろん買いはしなかったけれど。

ちなみにガソリンは1ドル(現地通貨はマナトだが、ドルも通用する)で4.5リットルくらい買えるそうだ。街には日本車、しかもレクサスなどの高級車が多く走っていた。ドバイ(アラブ首長国連邦の首長国のひとつ)から輸入した中古車だそうだが、使用年数などが限定されているとのことで、みな割に新しかった。

アハルテケに騎乗できる喜び

アハルテケは、シルクのような肌触り

3日目、いよいよ待望のアハルテケに会いに行く。アハルテケとは、トルクメニスタンの部族のひとつであるテカから付いた名前という説もあるとか。トルクメニスタンの国旗は世界で一番複雑とも言われ、5つの種族を表す複雑な模様が描かれている。

結局、来るはずだった日本語のガイドさんは姿を見せず、滞在中ずっと私たちは英語のガイドさんとやりとりしなければならないことになった。というわけで、ここに書いているガイドさんから聞いた話、もし聞き取りが間違っていたらすみません……。

ホテルを出て高速道路を45分、45kmの道のり。街から意外に近い。到着したアハルテケの牧場はすごく大きいわけではないが、旧ソ連時代の国営だった時期を含めると300年以上の歴史があるという。

頭数は35頭。かわいい仔馬(生まれて2日目!)が、すぐ目に入った。「早く乗りたい!」と思ったが、5月下旬でもすでに日中は暑くて乗れない。そのため、当初の予定の砂漠を移動するコースではなく、牧場から出発してまた牧場に帰ってくるということに変更になっていて、初騎乗は夕方になってから、となった。

その前に“ショー”を見るという。時々小雨が降る中、トルクメニスタン他数カ国を17日間でまわっているという日本人ツアー客13名と見たショーは、……残念ながら私が見たいと思っていた“ジギトフカ”ではなかった。

馬を立ち上がらせたり走らせたり、馬を初めて見る人にとっては感動的かもしれないが、私たちにとっては、ちょっとがっかりだった。ただ、そのとき初めて触ったアハルテケの体は、牧場のオーナーが言う通り、シルクのような手触りで、初騎乗が一層楽しみになった。

引き馬では、アハルテケのパワーを感じられない

夕方、いよいよ騎乗。私のパートナーとなった馬は、5歳のガルカマンという名前の牡馬。意味を聞いたら、フリーガンだという。顔はかわいいが名前からして、「暴れ馬か!?’と不安になった。鞍はブリティッシュ。頭絡もよく見慣れたもの。ただ、馬たちは鉄をはいていない。日本でも鉄をはいていない乗用馬はいるか、この国では競走馬も、レースのときだけ鉄をはくのだそうだ。ここでは装蹄するのは月2回、牧場のスタッフが行なうという。

乗る前にオーナーから、「マルタンガールは必要か」と聞かれた。細くても、とにかくパワーがあると聞いていたアハルテケ、さらに名前がフリーガンとなれば、迷わずYES。



馬さんが騎乗したガルカマンと、いろいろとお世話になったペナさん。

はじめに丸馬場で足慣らし、その後、牧場から外へ。1頭に一人ずつスタッフが付く。引き馬だ。常歩、時々速歩、で約2時間。初日は様子見なのだろう。名前に似合わず、引き馬ではおとなしい馬だった。アハルテケならではのパワーを感じることはなかったが、夕日を浴びたガルカマンの首は、金色にきれいに輝いていた。

牧場での宿泊は、定住型のゲルのような建物だった。エアコンはあるが使えず、ドアは虫が入るため開放できず、あまり快適とは言えなかった。スタッフは、食事係もみな男性。ここに宿泊した女性が過去いたのか、これは聞くのを忘れた。

翌日は午前、午後、約2時間ずつの騎乗。初日同様、ほぼ引き馬。仕方がないので、馬上からの眺めを楽しむことにした。牧場の外の様相は、アシガバットの街とはずいぶん異なる。ラクダがいたりヤギがいたり、スタッフはオーナー以外、トルクメン語しか話さない。

英語のガイドさんは馬に乗らなかったため、スタッフと、馬と、私たちのコミュニケーションは言葉ではできなかった。それでも、ガルカマンに付いてくれた若いスタッフのペナが、一生懸命トルクメン語を教えてくれる。ラクダはデュウ、ヒジはゴウン、馬はアトゥ……など。のどかでいいのだが、ほぼ引き馬ではアハルテケらしさを感じることができない。限られた騎乗の機会、思い切ってオーナーにお願いしてみた。「もし、私の乗り方で大丈夫であれば、少し走らせてほしい」と。

止めなければ、どこまでも走っていきそうな迫力

翌朝、馬にはすぐ乗らず、車で出発するという。車に鞍や水、干草を積み込み、馬はペナたちが鞍なしで乗って連れて行くとのこと。牧場から、少し離れたところで乗るのだそうだ。車で街中を走る。途中、ガイドさんが買い物のためお店に寄る。お店は平屋で、化粧品、洋服、靴、バッグ、電化製品などが所狭しと並んでいる小さなデパート、というよりは、取扱品の多いコンビニ、といったところだろうか。ただ、食糧品は別のお店で売っていたようだった。

再び車で走り、着いた先は砂漠だった。ゴミも落ちていますが、牛骨なども転がっている。今日は引き馬ではない。走ってよいという。過去にモンゴルで馬を走らせたとき、独特の掛け声を習ったが、アハルテケはどうすればいいのだろう。スタッフが、鞭の代わりに枝を渡してくれた。

いよいよ、アハルテケでの駈歩。教えられたように手綱を上の方で持ち、脚と同時に枝の鞭を入れる。すると……、背は高いのに歩幅が狭く、おとなしく常歩、速歩をしてくれていたガルカマンとは、まるで別の馬のようになった。私が止めない限り、どこまでも走っていくようだった。「いいの?ぼく走ったらずっと行っちゃうけど?」とでも言っているように。

ハミをかんだアハルテケの首がとてもいい感じだった

砂漠にはアップダウンがあり、上りだけでなく下りも走った。同行のFさんは走らなかったが、大人数で走ったらもっと楽しかっただろう。

ハミをかんだガルカマンの首は、非常によかった。もちろん横からは見られないが、いい感じだった。スタッフと話せたら、英語を話すガイドさんが馬に乗れたなら、「この首どう?」などと聞けたのにと、とても残念だった。しばらく楽しんだあと、再び私たちは車に乗り、ガルカマンたちは鞍を外されスタッフを乗せ、牧場に帰った。

牧場に着いた馬たちは砂浴び。体は夜、洗ってやるのだそうだ。長い昼休みをさみ、再び騎乗。今度は2時間、ひたすら常歩。ペナは自分のノキアのケータイ（スマホではない）で、動画を撮影してくれた。後ろ向きに歩いて、私が歩いていく姿を撮影して、牧場に帰ってからそれを見せてくれた。彼のケータイは小さく、画質もそれほどよくはなかったが、初めて自分がアハルテケに乗って歩いている姿を見ることができ、嬉しかった（牧場には、乗馬クラブにあるような鏡はない）。

せめてペナが英語を使えたら、せめて英語のメールを送受信できたなら、もしくは私がトルクメン語が分かったなら、メールアドレスの交換ができたのに、と非常に残念に思った。

次に訪れる機会があれば、もっと楽しめる!

翌朝、予定では騎乗後、市内に戻るようになっていたが、騎乗せずに早めに市内に戻るようになった。いつも通りの簡単な朝食後、オーナーと少し話をした。



旅馬さんが宿泊したゲルのような建物。主にモンゴルの遊牧民が使用する、移動式住居。トルクメニスタンの歴史を見れば、モンゴルの文化が伝わったとしても不思議ではない。が、この住居は移動式ではなかった。

オーナーに見せたくて、親しくさせていただいている画家、三浦裕子さんの個展の絵はがきを持参していたのだが、それを見たオーナーは、トルクメニスタンでもアハルテケの絵のコンペティションがあるから、出品すればいい。しばらくここに滞在し、日中は絵を描いて、朝晩、乗ればいいとすすめてくれた。

また、次回ここに来るときには、1カ月以上前に連絡してほしい。そうすれば、特別な馬を用意しておくとも。ただし、時期は3月末から4月、あるいは10月以降がよい、とのこと。

三浦さんがいらっしゃるようなことがあれば、私もお供しようと思う。

それからなぜか家族の話になり、「子どもはいるか?」と聞かれた（オーナーには美人姉妹のお嬢さんたちと、かわいいお孫さんたちがいる）。私が、「子どももないし、夫もない」と答えると、オーナーは「Why?」私は「Because I love horses.」

オーナーは、こちらがびっくりするくらいおなかを抱えて笑っていた。

そして、とうとう別れのときがきた。ペナたちが2頭の馬を連れてきてくれた。集合写真を撮ってお別れ。ガルカマンは名前に似合わず、やさしくてかわいい馬だった。せつかく慣れたのに……。

スーツケースを車に積み、私たちも車に乗る。動き出して、手を振った。馬たちも見えなくなるまで、ずっと見送ってくれていた。

市内に戻る途中、モスクをひとつ見学したあと、牧場にあった本で見た大きな競馬場にまわってもらった。開催日ではないため、見られたのは外観のみだが、すごく立派な建物だった。

広い道路にはアハルテケのモニュメントのようなものもあり、本当に馬(アハルテケ)の国、という感じであった。その後、世界遺産のニサの遺跡を見て、

ホテルに戻った。馬の国であれば、さぞかしいろいろな馬グッズが買えるだろう、と期待していたのだが、滞在中に買ったのは、ホテルの売店で見つけた、牧場にあ

ったものと同じ大きなアハルテケの本（英語版）と、あまりかわいいとは言えないマグネットだけ。馬友だちに何も買えなかった馬の旅は、今回が初めてであった。

（2014年 5月）



仔馬ですらこの貫禄、この美しさ。成長すると、平均体高152センチの名馬となる。